

愛えががおお顔顔



「エピソード」部門の知事賞・特別賞受賞作品については、水樹奈々さんの朗読に田村祐子さんのサンドアートアニメーションを合わせた動画作品をインターネットで配信しています。

愛顔感動ものがたり

検索

感動ものがたり

「感動のエピソード」

& 「愛顔の写真」

愛えががおお顔顔感動ものがたり
「感動のエピソード」
& 「愛顔の写真」

平成二十八年一月発行

発行 愛媛県

企画振興部地域振興局
文化・スポーツ振興課

〒七九〇一八五七〇

愛媛県松山市一番町四丁目四一

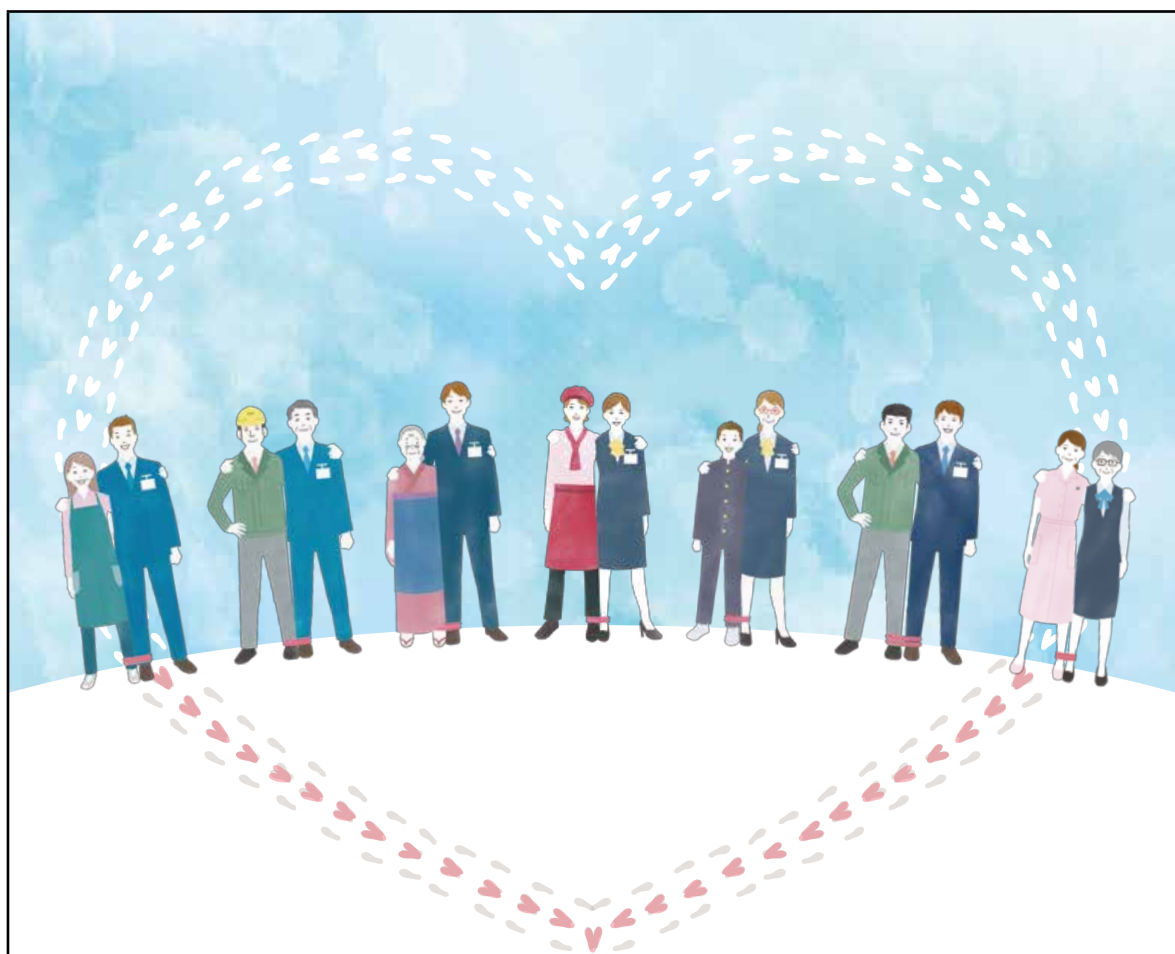
TEL (〇八九) 九二二一・二九七二

印刷 不二印刷株式会社

〒七九〇一〇〇五四

松山市空港通二丁目一三三〇

TEL (〇八九) 九七三一・二二六六



笑顔と一緒に

あなたの

愛媛に根ざす、
信用金庫として。
愛ある人と。
愛ある地域と。
歩んでゆきたい、
未来があります。

「愛」ある街のホームドクター
愛媛信用金庫

新しい力が、明日をつくる。

Challenge & Smile



個人のお客さま向けインターネットバンキング

いよぎんダイレクト

120,000ダウンロード突破/
ご利用はアプリからが安心・安全

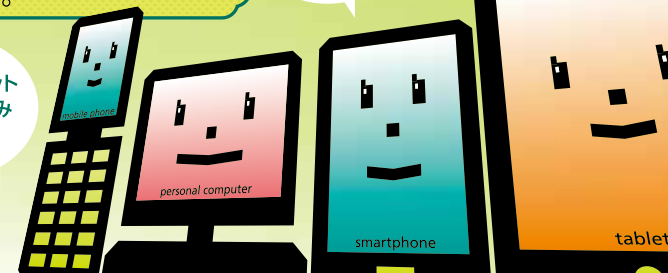


年会費無料で
24時間いつでも
利用OK!

忙しいあなたへ。スマホ、パソコンが銀行に。
いつでも 残高照会 お振り込み お振り替え 等が
ご利用いただけます。

インターネット
でお申し込み
ラクラク!

詳しくは、
伊予銀行ホームページを
ご覧ください。



●お問い合わせはお近くの(いよぎん)の窓口または[いよぎんテレホンセンター]
0120-64-1414 受付時間 9:00~20:00 (銀行休業日は除きます)

●ホームページ
<http://www.iyobank.co.jp>

Challenge & Smile
伊予銀行
(平成28年1月18日現在)



水樹奈々



愛媛銀行

愛顔とは？

人と人との助け合い、
支え合いの根底にある「愛」と、
困難にくじけることなく挑戦し、
道が開けた時にこぼれる「笑顔」が
結ばれて生まれた言葉。

愛媛県は、

「愛顔あふれる愛媛県」を

目指しています。



知事あいさつ

愛媛県知事 中村 時広

「愛顔感動ものがたり発信事業」は、愛媛県が提唱する「愛顔」を全国に広く発信し、本県の知名度向上と愛媛ファンの獲得につなげるとともに、「愛顔あふれる愛媛県」の実現に向けた機運醸成を図っていこうと昨年度から実施しているものです。

今年度は、内容をパワーアップし、「感動のエピソード」に加え、新たに「愛顔の写真」を募集したところ、エピソード部門には、全都道府県とイギリス、台湾から、3,128作品、写真部門については、45全都道府県から6,328作品もの応募をいただきました。厚くお礼申し上げます。

エピソード部門は、芥川賞作家で「千の風になって」の作曲家でもある新井満さん、本県出身の新進気鋭の俳人である神野紗希さん、そして私の3人が最終審査を行うとともに、写真部門では、世界的に著名な本県出身の写真家である白川義員さんにも御参加いただき、各部門の受賞作品

を選考いたしました。

知事賞をはじめとする各賞に選ばれました皆さん、誠にありがとうございました。選考にあたっては、受賞作品はもとより、どの作品も本当にすばらしく、大変苦慮するとともに、「愛顔」と「感動」がまつた作品の数々に大きく心を動かされました。中でも、エピソード部門で知事賞に輝かれた作品は、97歳になっても笑顔がいつもすてきな御主人へのあふれる思いを94歳の作者がつづられたもので、審査員一同胸を打たれました。

この冊子はそうした受賞作品をまとめたものです。本作品集が多くの方々の手元に届き、「愛顔」の輪が全国に大きく広がることを切に願っております。

終わりに、応募いただきました方々をはじめ、本事業にお力添えを賜りました関係者の皆様に深く感謝を申し上げます。

目次

「エピソード部門」

「知事賞」	九十七歳の誕生日	木下富砂子（静岡県）	8
「特別賞」	「ぎゅっ」〜輝いた一日〜	南川亜樹子（徳島県）	10
「優秀賞」	その木と一緒に	佐藤真由美（東京都）	12
	「はは だいじ」	荒木 光弘（東京都）	14
「入選」	親子の愛	新山 美沙（愛媛県）	16
	ありがとう	中西喜美代（奈良県）	18
	届けられたニコちゃんマーク	大野 裕子（愛媛県）	20
	嫁に来んか	松川千鶴子（兵庫県）	22
	助手席のじゃこ天	門前 要佑（東京都）	24
	前向き思考のススメ	吉住 牧人（愛媛県）	26
「佳作」	幸福の原因	小森ちあき（大阪府）	28
	いい予感	大澤 優子（広島県）	29
	たっくん	宮崎 純子（愛媛県）	30
	父の日のカーネーション	矢代 稔（神奈川県）	31
	いちばん良く効く薬	秋山 瑞葉（香川県）	32
	母親の笑顔	與曾井由紀（岡山県）	33
	愛顔の運動会	西田 金吾（大阪府）	34
	心のリレー	吉原 詩織（愛媛県）	35
	命と生きる	三好 舞（愛媛県）	36
	母との約束	宮川 勉（大阪府）	37

「写真部門」

「一般の部」	「知事賞」	がんばったね！〜わたしがママより	松元 澄夫（奈良県）	40
	「白川義員特別賞」	夏を満喫♪	波木井勇次（静岡県）	40
	「河原学園賞」	じいじって面白いね！	中村 天津（京都府）	40
	「優秀賞」	隠しきれない愛顔	村上 錠（愛媛県）	41
		あそぼうよ！	佐藤 真弓（北海道）	41
		進撃の野菜	鈴木 緑（埼玉県）	41
	「入選」	まんめん	谷口 政彦（京都府）	42
		青空と笑顔	藤山 香絵（大阪府）	42
		お嫁さんとケンカ後	岡本 吉晋（愛媛県）	42
		ずっとずっと友達	大野 久子（神奈川県）	42
		ジャッソップ	石田めぐみ（北海道）	42
「高校生の部」	「知事賞」	麦藁笑顔	出崎 理子（和歌山県）	43
	「白川義員特別賞」	愛顔で一等賞	越智 健斗（愛媛県）	43
	「河原学園賞」	歓喜の笑顔	是澤 亮太（愛媛県）	43
「中学生の部」	「知事賞」	まだ夢の中。	井上 颯人（愛媛県）	44
	「白川義員特別賞」	みんなでラッコの気分	濱上 夕夏（愛媛県）	44
	「河原学園賞」	おいしそう	山本 有紗（愛媛県）	44
「小学生の部」	「知事賞」	勝つてうれしい はないちもんめ	丸山 真司（愛媛県）	45
	「白川義員特別賞」	ママといっしょに	橋本さゆき（兵庫県）	45
	「河原学園賞」	さあ！やるよ！最高の演奏を！	田頭まなみ（愛媛県）	45
		「愛媛県獣医師会賞」	理沙ちゃん	笑顔がすてき。おいしい給食
		「愛媛県情報サービス産業協議会賞」	未来への希望	
		「愛媛県歯科医師会賞」	新谷じいちゃん	ばあちゃん
		「愛媛県理容業生活衛生同業組合賞」	笑顔の叫び	
		「愛媛県旅行業協会賞」	しあわせ！	
		「愛媛県経済同友会賞」	元気なお婆ちゃん	
		「愛媛県商工会議所連合会賞」	最高の笑顔	
		「愛媛県広告協会賞」	愛姫の笑顔で	お国自慢
			和泉 茉桜（愛媛県）	46
			政岡 宙（愛媛県）	46
			丹下 真央（愛媛県）	46
			川本 雅士（愛媛県）	46
			遠峰 綾華（茨城県）	46
			坂本 静華（愛媛県）	46
			高橋 一吉（兵庫県）	46
			吉田 珠里（愛媛県）	46

「エピソード部門」



あなたの地域に、あなたの暮らしに。
 今日も、明日も、寄り添っていく。

- ひと ●終身共済 ●医療共済 ●引受緩和型定期医療共済 ●がん共済 ●介護共済 ●予定利率変動型年金共済 ●養老生命共済
 ●こども共済 ●定期生命共済 ●傷害共済 など
- いえ ●建物更生共済 ●建物更生共済 My家財 ●火災共済 など
- くるま ●自動車共済 ●自賠責共済
- ご加入にあたりましては、お近くのJA(農協)へお問い合わせください。 ■JA共済ホームページアドレス <http://www.ja-kyosai.or.jp>

JAはじめて共済 (本サイトから以下の共済種類の資料請求・借金試算ができます。) はじめて共済 検索

医療共済、引受緩和型定期医療共済、がん共済、介護共済、
 予定利率変動型年金共済、こども共済、建物更生共済、自動車共済

<http://shiryo.ja-kyosai.or.jp>



くらしの保障、相談するなら **JA共済** 15389990300

長時間の移動が
 心配になる方に朗報です。
 このたび、吸水スピードが
 6倍になりました。



ナチュラ さら肌パッド
 大王製紙株式会社

elleair エリエール

- 6倍スピード吸収で安心! (100cc、180cc、210ccのみ)
 一気に出た水分も素早く吸収する「スピード吸収ライン」で、もれに安心!
- かゆみの不安にやさしい!
 「さらさら持続シート」が水分をすーっと引き込んで、表面はさらさら!
- ダブル消臭で安心!
 酵素成分配合、下着内のアンモニア臭、汗臭をしっかりと消臭!

6倍スピード吸収

ナチュラ さら肌 検索
<http://www.elleair.jp/natura/>
 本製品のお問い合わせはお客相談室 0120-205-205へ



エネルギーを
 もらったのは、
 クルマだけじゃ
 なかったみたい。

この星と人のチカラに。
SOLATO
太陽電池株式会社 <http://www.saiyoo.com/>

九十七歳の誕生日

木下富砂子（静岡県）

九十七歳の誕生日を迎えた夫の笑顔は、優しく美しく明るい。何故なんだろう。酒なくては済まされなかった祝いの盃に、ほんのちよつと口をつけただけなのは何故なんだろう。ケーキなど見向きもしなかったのに、娘の切り分けたそれに箸をつけているのは何故なんだろう。ハッピーバースデートゥーユーを歌う子や孫に、声を合わせているのは何故なんだろう。

数年前から認知症の薬を飲んでいますが。サービス付き高齢者住宅に二人で住んでいます。この日は、遠くに住む息子や孫も顔を見せて、夫の笑顔は常にも増して輝いています。

宴が果て誰もがいなくなつて、私は窓辺に立って夜空を眺めています。中空に白い三日月が出て、星が一つ光っています。幾光年を経て、地球に光が届くのだと聞いています。人が死んだらお星さまになるのだ

と、子供のころ聞いていました。四人の子に心を遺しながら逝つた子等の父親は、どの星なのでしょう。

六十年前、私は彼の兄嫁でした。四人の子連れ私との結婚に、彼の親や兄弟が反対したのは当然です。険しく苦しい道でしたが、今も昔も、彼の笑顔は何時もいつも素敵なのです。彼って、夫です。

もそもそと起き出してきました。傍へ来るのかと思つたのですが、トイレに入ってしまった。用を済ませてベッドに戻ってしまいました。

「月がとっても青いから遠回りして帰ろ」

こんな歌が好きです。月の砂漠、荒城の月が大好きです。夫がハーモニカを吹いて私が歌って、そんな日がありました。夫は今、そんな日を忘れてしまつて、今日のこと昨日のこと何れもかも忘れてしまつて、でも笑顔だけは忘れません。

きっと死が訪れるその日まで。いえ、笑顔のまままで眠つたままで。何故って夫の笑顔は心の豊かさの証ですから。

「特別賞」

「ぎゅっ」〜輝いた一日〜

南川亜樹子（徳島県）

カッ君との出会いは私が図書館で働き始めた頃に遡る。初めて読み聞かせをした日、一番後ろにちょこんと座っていたのがカッ君だ。

初日に私が選んだのは『ぎゅっ』という絵本だ。動物の子供がお母さんに抱っこされる画面が次々と描かれる、人気の作品だ。三十人程の子供達を前に、先輩と交代で読み始めると、子供達が絵本の主人公と同じように驚き、悲しみ、喜ぶ反応が直に伝わってくる。

そんな中、口を一文字に結び、無表情な男の子が気に掛かった。後で先輩に聞き、その子の名前はカッ君で、四歳であること、発達障害を抱えていること、本が好きで毎回母親と一緒にお話会に参加していることを知った。

ある日、先輩がお休みで、急きょ独りでお話会を担当することになった。練習時間も無く、不安を抱えたまま本番の時間を迎えた。

案の定、読み始めて間もなく、子供たちがざわつき始めた。一人が席を立つと、つられて隣の子も立ち上がり、あっという間に歩き回る子供たちで部屋は混沌状態になった。「静かにしてね」と叫んではみるも、一向に収まる気配は無い。終には二人の男の子が喧嘩をし始め、一方の子が泣き出してしまったのだ。

私がどうして良いか気を探っていると、それまで身を固くしていたカッ君がすつくと立ち上がった。そして、泣いている男の子に近づき、その身体を腕一杯に抱き締めたのだ。部屋は水を打ったように静まり返り、皆、驚いてカッ君をただ見つめていた。

「ぎゅっ」次の瞬間、カッ君が呟いた。すると泣いていた男の子が照れたようにはにかみ、周りの子供達からも笑顔がこぼれた。

「皆、こんな風にぎゅってされると嬉しいね。今から絵本の『ぎゅっ』を読むから聞いてね」私の声に子供達が絵本の前に集まってきた。カッ君のおかげで風向きが変わったのだ。

終わった後、カッ君に「ありがとうね」と言うと、口の端を上げて、微笑かにコクンと頷いた。カッ君の極上の笑顔はこの日一番輝いていた。

その木と一緒に

佐藤真由美（東京都）

私が九歳の頃、いつも忙しく家に居ない父が珍しくお休みで、おやつに二人で枇杷を食べました。食べると大きな種が出てきて、父と居られたことが嬉しくてその種を父と庭に蒔きました。毎日毎日水をあげ、まだかな、まだかな？と芽が出るのを待ち続け、芽が出た時は飛び跳ねて喜び、遅く帰る父に芽が出たことを手紙で報告しました。

それから葉が増え幹ができ枝が出て、木になったのは私が高校生の頃。細く長くひよろつとしたその木は、私によく似た背格好でした。その頃の私は反抗期真っ盛りで父とはろくに会話もせず、病気で父が体を壊し入院した時も何を話しているのかわからず、病室で痩せて眠る姿をただ眺めていただけでした。

そんな反抗期も過ぎ、枇杷の木は背は伸びても一向に花をつけることなく、ただお日様の方を向いて立っていました。

この木が花をつけたのは私がお嫁に行った年。まるでベールを被ったように白い花を咲かせました。そして二十二年経った今年、初めて実をつけました。たったひとつの小さな実を上の方にひとつ。私は今年、娘を出産しました。「まるでお前を映したような木だね、この木は。」と父がにこやかに目尻に皺を寄せて話す姿に時の流れを感じ、確かななあと空を見上げました。この先も庭先の枇杷の木を家族皆で眺めていたいです。来年実をつけたら、娘に食べさせてあげよう、一緒に種を蒔こう。そしていつかこの話を娘に話してあげようと思います。父のように、目尻に皺を寄せて。

「優秀賞」

「はは だいじ」

荒木 光弘（東京都）

居間で新聞を読んでいると、小学二年の孫の授業参観に行っていた妻と嫁が笑いながら帰ってきた。

「いつも厳しくされているのに、やっぱりママの事は好きなんだね」と、妻が言うと「本当に、うれしくて泣きそうになっちゃった」と嫁が言った。

何事かと聞くと、教室のうしろの壁に生徒の書いた習字の半紙が貼ってあり、「私の大事なもの」という題で書かれていた。

「べんきょう だいじ」、「ともだち だいじ」、「スポーツ だいじ」など、色々な言葉の中に、孫の半紙を見つけた。そこに書かれていたのは、「はは だいじ」それを見た妻と嫁は目を合わせ感激したという話であった。

「へー、あの子がね」私は驚いた。毎日毎日、のんびり屋の孫は「早

く起きなさい」、「宿題やった」、「さっさとしなさい」等々、せかされていたから。

妻と嫁が夕飯の買い物に行った頃、孫が帰ってきた。

「お前、毎日毎日、口うるさく言われてもママの事が好きなんだな」と、習字の言葉について聞いてみた。すると、「母、大事」じゃないよ。「歯は大事」って書いたんだよと、自分の歯を指差した。「えっ！」私はびっくりした。

「前、学校の授業で、大人の歯が虫歯になったら、もう新しい歯は生えないので、大事にしましょうって、習ったから書いたんだ」と言った。私は、おかしくて、うれしくて、ふきだした。そして、その事はぜったいに誰にも言っちゃ駄目だよと、男同志の指きりげんまんをした。

その日の夕飯はスキヤキだった。

「いつもより高いスキヤキ肉だよ」と、うれしそうにしていた妻と嫁を横目に見ながら、孫と愛顔で目を合わせ、おいしくスキヤキを食べたのでした。

親子の愛

新山 美沙（愛媛県）

私の家は酪農をしており、私は二ヶ月に一度のペースで命の誕生に立ち会うことができます。今までに何十頭もの牛の出産に立ち会ってきましたが、何回見ても感動します。その中でも、忘れられない出産があります。

小学五年生の夏、夜中の二時頃、祖父母が急いで牛小屋へ向かう音で目が覚めました。出産日の近い牛がいると聞いていたので、気になって私も牛小屋へ向かいました。案の定出産が始まっていて、祖母に状況を聞くと、「逆子みたいやけん、難産にならない。」といわれました。逆子の出産は子牛が無事に生まれなにかもしれないことを知っていた私は、苦しんでいる親牛を必死で励ましました。朝方五時頃、ようやく足が出てきたので、出てきた足を縄で縛って引つ張り出すことにしました。私と祖父母の三人で縄を引き、三十分後、ようやく生まれました。

いつもなら、子牛はすぐに鳴き、一時間もしないうちに立ち上がります。しかし、生まれた子牛は、鳴きもせず、立とうともしません。

「やっぱり、いけんかったか。」と祖父は言いました。親牛は異変に気づき、子牛をなめ始めました。私は子牛が死んでしまったのだと思い、子牛の体をなめ続ける親牛の姿を見て、悲しくて泣いてしまいました。祖父母も、もうだめだろうと諦めかけた時、子牛の足がピクツと動き、メエーメエーと鳴きだしたのです。私はうれしくてまた涙が流れました。祖父と祖母を見ると、やはり泣き笑いのような顔をしていました。

この時子牛の命が助かったのは、親牛の愛が伝わったからだと思っています。恋人同士、友達同士、さまざまな関係の間に愛は存在しますが、何よりも大きく強い愛は「親子の愛」だと思います。私も両親から愛をたくさん受けて育ちました。将来私自身が親になる時が来たら、両親やこの親牛のように、愛をいっぱい与えられる親になろうと思います。

「入選」

ありがとう

中西喜美代（奈良県）

四十年前の秋、高一の女子クラス担任の私は体育祭準備で遅くまで残り、家庭は二の次だった。そんなとき、四歳の我が子が熱を出したから迎えに来るように、と保育園から電話があった。すぐに園へ向かい、医者への勧めるまま大病院へ。検査だけのつもりが即刻入院。十日目に子供は逝ってしまった。

恐らく能面のような顔で教壇に立っていたある日。教室の後ろの生徒が「ひよつとこ」の顔をして見せた。

「センセ笑いはった!」

誰かがそおっと拍手した。釣られて皆が拍手し出した。

彼女らはじっと見守ってくれていたのだ。溢れてくる涙を拭こうと隅っこに行ったとき、花瓶に活けられたコスモスの花が目に入った。

「綺麗な花、ありがとう」

「毎日皆で活け替えてたん。今日は私の番。やっと気付いてくれはった」

前の生徒が後ろ向きになり、笑ってガッツポーズした。

「今や! センセにアレ見せようよ」

「ひよつとこ顔」をした生徒が背後に何やら隠して教壇に躍り出た。皆、前に駆け寄った。「ひよつとこ」が「校長先生」になり、表彰式になった。「表彰します。行進の部。第一位。一年七組。チームワークの見事さは感動的でした」涙が止まらなくなり、無理に笑った。

「センセ、笑うてる顔の方がええよ」

我が子が死んだ日は体育祭だった。通夜に生徒たちは集まってくれていた。

時は流れ、結婚・出産と人生の節目節目に私を訪ねて来てくれる彼女たちは今や五十五歳。今の私は数年して授かった次男の子供を連れてちよいちよい運動会を見に行く。

あと五年すれば、彼女らは還暦、私は喜寿になる。その同窓会で、もう一度、私は笑顔でしっかりお礼を言いたい。

「入選」

届けられたニコちゃんマーク

大野 裕子（愛媛県）

はるか三十年前の記憶を紐解いてみる。当時二十五歳の私は、落ち着いてもいい年齢にも関わらず、少しヤンチャな生活を送っていた。友人と一晩中車を走らせたり、朝まで飲み明かしたり……。そして、朝帰りの時間にアパート前でバツタリ出くわすのが新聞配達の少年。

「よっ!!新聞少年!!今日も御苦労である。」と絡むチャライおばさんを、高校生ぐらいの少年は怪訝そうに睨んで足早に駆け去った。

ある日、とても悲しい事があった私は、ヤケ酒をあおり、友人と別れた後、夜明けにアパートの部屋の前まで帰りつき、そこでこらえていたものがドツと溢れ出し、ボロボロと泣き崩れてしまった。そこへ現れた新聞少年、(当時はドアポストまで配達してくれた)

「ヤなもんみてしもた……。〴〵と思ったかもしれない。数秒の間があり、「お姉さん、ファイトだよ。」と丸めた新聞紙で私の頭をポンポン。そし

ていつもの様に駆け去った。

翌朝、部屋の前に栄養ドリンクが一本置かれ、その下に小さなメモ用紙。そこにはニコちゃんマークが一つ描かれていた。次の日、また次の日と、栄養ドリンクとニコちゃんマークは四日程続いた。ボロボロの姿を見られた気恥ずかしさがあり、その後は顔を合わせられなかった。でも少年の優しさに胸がキュンとなり、朝早くにドアの覗き穴からドキドキしながら息をひそめて見ていた。

そのうち朝の届け物はなくなり、担当もいつしか替わってしまった様だ。

バイト代で買ったのだろうか? 「ファイト」の栄養ドリンクと、いびつな丸の中に描かれた笑顔の目と口。冷蔵庫のドアにマグネットで貼りつけ、長い間見守ってくれていた。

あれから三十年、もう四十代後半になるのだろうか? 優しい眼差しをした素敵なオジ様になっているのだろう。〴〵思いやり〴〵をありがとう。

嫁に来んか

松川千鶴子（兵庫県）

夫と付き合ってまだ間もない十八の頃、彼は私をお祖母ちゃんに紹介した。彼の両親は食堂を営み、お祖母ちゃんが彼の子守をしていた。そのため、彼はお祖母ちゃんと物心つく前から二人で暮らし、成長してもお祖母ちゃんの家から幼稚園、小、中、高校に通っていた。「親と住まんの？」と、私の質問に「俺が祖母ちゃんところから出たら、祖母ちゃん一人になって寂しいやろ。」と、彼の優しさに胸がジーンとした。

私はクッキーやケーキを作ってはお祖母ちゃんに持って行った。「また来てな、待つとるじえ。」帰り際のお祖母ちゃんの言葉に「うん。」と、応えている内に、彼がヤキモチを焼くくらい、毎日のように彼に会うよりもお祖母ちゃんに会いに行った。お祖母ちゃんは、戦時中の話や昔の思い出話を何度もした。私はふんふんと何度も頷いた。お祖母ちゃんは私の手を握り、涙したことも幾度もあった。私も、お祖母ちゃんに何で

も相談するようになり、二人の間には友情が芽生えていった。しかし、その一年後、私と彼は些細なことが原因で別れてしまった…。

ところが、別れて一年後、お祖母ちゃんから彼がバイクで転倒したから病院に来てくれと、突然電話が掛かってきた。驚いて駆けつけると、お祖母ちゃんが「何じえ、来んようになったんじえ。」と、彼のことなどそっちのけで私に抱きついて泣いた。「ごめんね。」と、私もお祖母ちゃんの顔を見ると泣けてしまった。彼は、幸い命に別状なく左足骨折だけで一ヶ月で退院した。その後、私たちは、お祖母ちゃんの後押しで寄りが戻り、私はお祖母ちゃんの「嫁に来んか。」の一言で、彼と結婚した。

結婚式で誰よりも喜んでいたお祖母ちゃん。その笑顔は、くつきりと脳裏に焼きついている。お祖母ちゃんはそれから四年後、ひ孫の顔を見て天国に旅立ってしまったが、今もずっと天国から笑顔で見守ってくれている。

助手席のじゃこ天

門前 要佑（東京都）

私はお腹を空かせて宇和島の夜を彷徨っていた。初めての出張、どこに名店があるかなんて分かるはずもなかった。

商店街から一本入った路地に小料理屋さんを見つけた。生け簀の中の鯛や平目の舞い踊りに誘われるまま、その店の暖簾をくぐった。

「初めて宇和島に来たのか」無骨な大将はそう言って鰹の刺身をカウンターに出した。「せっかくだから、今日は旬の物を出してやろう」ウツボのたたき、じゃこ天、メバルの煮物。あっという間にカウンターがご馳走であふれた。まさに竜宮城だ。私は次々とご馳走を平らげる。大将と女将さんは静かに笑っている。これほど愛情のこもった料理を食べることは久しくなかった。仕事が辛かった時期ということもあって、最後はポロポロ涙をこぼしながら鯛飯を平らげた。

「はい、お会計」紙には千円と書かれてある。おそらく八千円分は食べている。「いいから」女将さんは静かに笑っている。次回からお金を払うと約束し、以来小料理屋さんとの付き合いが始まった。私は必ず京都のお土産を携え、女将さんに手渡した。

付き合いが五年を経ったころ、私は仕事の担当地域が変更になった。「長い間有難うございました。明日が最後です」「残念ね」女将さんは電話口でつぶやいた。

最後の日。カウンターにはいつも以上にご馳走が並んだ。「あの人昨日から気合が入っちゃって、朝市で一番良い魚を競り落としたのよ」と女将さんはそっと教えてくれた。

いつも以上に料理は美味しかった。大将も私もいつも通りに振る舞った。「嫁が出来たら、顔出せよ」私も笑顔でうなづいた。

「門前さん、お客さんです」翌朝フロントの電話で目が覚めた。ロビーに行くと、山盛りのじゃこ天を持った女将さんが立っていた。

女将さんと固い握手を交わし、助手席に山盛りのじゃこ天を置いた。涙で視界がはつきり見えない。私は、ゆっくりとアクセルを踏みこんだ。

前向き思考のスヌメ

吉住 牧人（愛媛県）

私の父は、小学生の頃から足に障害を持ちながら生活してきた。戦後間もなくの誤った民間医療などが原因で、父の足は棒のようになり関節がうまく曲がらない。中学校の体育の授業は、見学しかさせてもらえなかったそうである。

足を引きずりながら歩く父の姿を私も幼少時から見てきたが、不思議なことに父が哀れだ、かわいそうだと感じたことは一度もない。そう私に感じさせなかったのはある意味父の偉さだったのかもしれないが、今考えると、父自身がそのことをことさら意識せずに生活してきたからなのかもしれない。

父は中学校の音楽教師をしていたが、勤めていた中学校の生徒から「足が悪いことでつらいと思ったことがあるか」と聞かれたことがあったそうである。その時の父の答えはおおよそ次のようであった。

確かに私は「走ることを始めとして他の人から見ればできないことがたくさんあるかもしれませんが。でも、私は「自分で歩くこと」もできるし、「車を運転して家族と旅行に出かけること」もできます。できないことを悔やむよりもできることを喜ぶ生き方が楽しいと思いますか。

もちろんここに至るまでには父なりの葛藤があったはずである。どうしてこんなことになったのだろう、なぜ自分だけが走れないのだろうと悲嘆に暮れた時期もあったに違いない。けれども、いつまでも後ろを振り返ってばかりでは前に進めない。今の自分を受け入れ、現状を前向きに捉えて行動することでは、人はよりよく生きていくことはできない、そう父なりに考え直したのだ。

人間なんてちっぽけな存在である。できることよりもできないことが多くて当たり前なのだ。

今年七十五歳を迎えた父。ステージ上で指揮棒を振るその後ろ姿は、今日もきらきらと輝いている。

幸福の原因

小森ちあき（大阪府）

市営図書館で知り合った高齢者ご夫妻宅に、時折伺う。そのお宅には、常時数人の中高生達が入りしめていたが、その理由をご夫妻は語られない。しかし、彼らは、何らかの理由で心に深い傷を負った若者達で、元教員だったご夫妻は勉強を教えたり、辛い胸の内に寄り添われていることを、いじめで不登校になったという女子中学生が教えてくれた。

ある日、見慣れぬ女の子がリビングの窓際に座り冷めた眼差しを遠くに流していた。名前はA子。高校二年生だと、男子高校生が教えてくれた。皆が気にはかけていたが、話しかけることはしない。それは経験上、見守ることの大切さを、痛感しているからだ。

それから数週間後「孫が来るからいらっしやらない？」と奥様から電話を受けた。ご夫妻に実子はない。しかし、お二人にとっては、ここに来た若者達全員が我が子同然の存在であった。その日も、A子は窓際に座り誰とも視線を合わせようとしなかった。間もなく、この家から巣立ち結婚した。という若い夫婦が生後間もない赤ん坊を抱いてやって来た。純粹無垢な表情で、母親に抱かれる赤ん坊に若者達は、宝物を見つめるような輝ける視線を送っていた。

そんな中、母親が赤ん坊を抱いたままA子の所に行き「抱いてみない？」と言った。きつと、人の輪に入らぬA子の心情を汲み取ったのだと感じた。皆が見守る中、とまどうA子に母親は「お願い」と赤ん坊を渡した。A子は、壊れ物を扱うように丁寧に赤ん坊を抱いた。しばらく赤ん坊を見つめていたA子は、小さな声で「可愛い」と囁き、優しい笑みを浮かべた。その笑顔は、悲嘆に暮れた長い時間を乗り越えた者だけが得る、高貴な魂の輝きを感じさせるほど美しかった。その様子を見て、A子の回りにたくさんの笑顔が歩み寄った。「泣く時は一人。でも、笑えば皆も一緒に笑う。笑顔は、幸福の結果ではなく、幸福の原因なのだ」とご主人が若者達の輪を見つめ、嬉しそうに呟いた。

いい予感

大澤 優子（広島県）

木枯らしが吹くころになると、決まって届いた故郷からの便りがあった。

「道後温泉のお湯仲間で、親せきが島で伊予柑作りよる人がおつてな、粒がこんまかったり傷があるいうても、新しゅうて甘いんよ。伊予柑はいい予感いうて縁起物なんじゃと」

母は一冬に何度も、同じ口上を繰り返した。

「そんなにしよつちゅう送つて来られたら、近所に配つても余つて腐らすだけなんよ。こないだ送つてくれたばかりじゃし」

私が電話口で即座に断つても、母はせっせと段ボール箱で伊予柑を送り続けた。

しかし、母が七十八歳で亡くなってからは、もうその便りは二度と届かなくなった。

母の四度目の命日に郵便受けを覗くと、高校の同窓会の案内が配達されていた。

還暦で父が亡くなってから、二十年間母は松山で一人暮らしをしていた。その母も他界して帰る家を無くした私は、松山を訪れる機会もその勇気さえも無くしてしまっていた。

スーパーで籠に盛られた伊予柑を見ると、切なくて一瞬ためらったけれど、みずみずしさにつられて買うことにした。ごつごつした分厚い皮に爪を立てて剥くと、甘酸っぱい香りがして、どこかで「いい予感」とよやく声があった。私は、同窓会の返信はがきの出席欄に丸をつけ、ポストに投函した。

瀬戸内海に浮かぶ島には、冬の真昼の白い陽光が差している、きらきらと輝くさざなみを見つめていると、涙がぼろぼろこぼれた。

同窓会の席で少し酔った私は、仲が良かったトモコさんに母から届いていた「いい予感」の話を何気なくしてしまつた。彼女は目を潤ませながら私の話を聞いてくれていた。

それからほどなくして、箱いっぱい「いい予感」が届いた。トモコさんからだった。

その中からとりわけずしりと重い二つを仏壇にお供えした。線香に火をつけ「いい予感」とつぶやくと、新しい年の光の中で、父と母の遺影がちょっとだけ笑ったような気がした。

「佳作」

たつくん

宮崎 純子（愛媛県）

次女が中学二年生の冬、はじけるような笑顔が消えた。バスケットボール部で、元気に体育館をかけまわる。文化祭では、校内合唱コンクールの指揮者をつとめた矢先のことだ。

家族四人で囲む、楽しい食卓。娘たちの学校の話でもちきりだが、あの日はちがった。

学校から帰ってきた次女は、まるで抜けがらだった。クラスの誰も、次女とは口をきかない。話しかけても聞こえないふりをする。教室に入ると、次女の机の上は、消毒用アルコールでびしょびしょにされていた。「かわいそう」長女は、目に涙をためてつぶやいた。こんなやりきれない思いで、夕食を食べる日が来るとは思わなかった。

いじめは繰り返された。夜八時ごろ、担任から電話があった。クラスで孤立している次女を心配してのことだ。他のクラスの担任から通報があったという。体調不良のため、担任は休みをとっていた。

「心配ないです。出口は見えますから」私は高めのトーンで答えた。病気の担任に、不安は口にできない。木枯らしが吹く迷路で、ただ立ち尽くすばかりだった。

数日後のことだ。ひとりぼっちの次女の席に、たつくん

が来た。背の高い、穏やかなクラスメイト。絵がうまいと、次女から聞いて知っていた。たつくんは、はつきりと言った。「俺は宮崎と話すけん」

次の日も、その次の日もたつくんは話しかけてくれた。当たり前のように。迷路の出口を示す光が見えた。我が家の食卓にも、活気が戻った。次女はあつあつの茶碗蒸しを一口ほおばり、「おいしい！」とにっこりした。

たつくんの勇気ある一歩は、二年二組のじめじめした空気に風穴をあけた。僕も私もと、次女に話しかける生徒が増え、潮がひくようにいじめは消えたのだった。

中学の卒業式。私は長女と二人で、たつくんにお礼を言いに行った。たつくんは何も答えず、春風のような涼しい顔で笑った。

「佳作」

父の日のカーネーション

矢代

稔（神奈川県）

すばらしいさつき晴れの日曜日でした。こんな日は、小さい子どもたちと動物園にでも出かけたところですが、私も私は、ある会社の面接を受けにいかねばなりません。その年の春に会社をやめた私は、五月になっても仕事探しの日がつづいていたのです。

夕方になって帰ってきた私が食卓につくと、テーブルの花瓶に赤いカーネーションが二本挿してありました。私は妻にたずねました。

「この花はどうしたの」

「母の日のカーネーションよ」

「そうか、きょうは五月の第二日曜だった」

「それで子どもたちが、おこづかいでカーネーションを買ってプレゼントしてくれたの」

妻は、添えられた手紙を見せてくれました。

『毎日おそうじとおせんたくをありがとう。』

これは、小学二年生のお姉ちゃんの字。

『おいしいおりょうりをいつもありがとう。』

こちらは、まだ幼稚園児の弟の字でした。

妻が二階にむかって、「ごはんですよ」と声をかけると、

二人は、すぐにおりてきました。

「ママ、いつもありがとう」

食事の前に家族四人が、この上なくやさしい愛顔を交わし合います。妻は言いました。

「ありがとう。このカーネーションは、お父さんにもあげたいと思うの。近ごろ家の仕事は、お父さんがやってくれているでしょう」

そう、毎日仕事に行く妻に代わって、最近、もっぱら私が部屋や風呂場の掃除、洗濯、料理などを引き受けているのです。

「お父さんママもありがとう」

二人の言葉に私たちは大笑いしました。

それから一か月あまり。私は就職が決まって新しい会社に勤めはじめていました。

六月の父の日に、子どもたちは折り紙のカーネーションを私に贈ってくれました。花が黄色くて黒いしまもようがあります。

「虎のもようみたいなカーネーションだね」

「お父さん、タイガースの大ファンだから」

私は嬉しさのあまり涙がこぼれそうでした。

「佳作」

いちばん良く効く薬

秋山 瑞葉（香川県）

小学生の時、母が癌で入院した。いつも元気に台所に立つ母が、病院のベッドでやつれているのは、胸が張り裂けそうに辛かった。

お父さんは家族のために働いている。お婆ちゃんはお母さんの看病をしている。お医者さんは病気を治し、看護師さんは身の回りの世話をしてくれる。じゃあ私は？私は甘えるばかりで、お母さんのために何もできていない。頭を悩ませた後、きれいな花を摘んで母に贈ろうと決め、川べりへ向かった。

カラシナが満開だった。数本摘み、意気揚々と病院へ向かうとしたが、川辺の石につまづいた。膝に小石がめり込み、血がだらだら流れた。痛みで涙が出そうになったが唇を噛んで耐える。母に心配をかけないように川の水で血を流し、足を引きずって病院へ向かった。

「まあ、足どうしたの！」

もちろん母が気付かないわけなかった。母は看護師さんに消毒液と包帯を頼み、私の膝の手当てをした。どこで怪我したの、と問われ、カラシナを差し出した。

「これを取りに、川に行つてたの。お母さんの為に何かしたかったから」

母は私の膝と頭を撫でありがとと呟いた。

「すごく嬉しい。でもね、みっちゃんは、もういっぱいお母さんのためになつてるよ。お母さんの病気にいちばん良く効く薬は、みっちゃんの笑顔なんだよ」

母の病が心配で、笑顔が減っていた私を心配していたのだろう。ほら笑って、と母が脇をこちょこちょとくすぐる。我慢できずに声を立てて笑うと、母の顔にも笑顔が広がった。

「みっちゃんの笑顔の薬で、癌も飛んでいっちゃったみたい」

退院の日、私の頭を撫でて母はそう言った。カラシナの花束を差し出し、退院おめでとう、ととびきりの笑顔で伝えると、母も笑ってありがとと答えた。風が吹き花が揺れ、カラシナも笑っているようだった。

「佳作」

母親の笑顔

與曾井由紀（岡山県）

私は母親に向いていない。

「おかあさん、みてみて！おーきなくりのーきのしたでー。じょうず？」

三歳になったばかりの天真爛漫な娘の美希が、笑顔でみてみてアピールしてくる。

「・・・うん、上手上手。」

と、愛想のない返事をする私。子どもの目線に下りることができない私は、作り笑いすらできない。誰かに見られているわけでもないのに、明るい笑顔の母親を演じることが恥ずかしいのだ。児童館などで目に子どもと楽しそうに笑い合うママたち。「あんなにはしゃいで恥ずかしくないのかなあ」と、冷ややかな感情を抱きつつも、「あんなお母さんだったら、子どもも幸せなんだろうな」と、本当は羨ましく思っていた。

それは突然だった。右の卵巣にがん細胞が見つかった。

「おかあさん、みてみて！おーきなくりのーきのしたでー。じょうず？」

懲りもせず、満面の笑みでアピールする娘。がんを告知されても動じなかった私が、娘の笑顔を目にした途端、私を構成する六十兆個の細胞全てがカーッと燃えるように

熱くなる感覚に襲われた。「あと何年この笑顔を見ることのできるんだろう？」そう思った瞬間、

「上手、すごく上手！もう一回やって！」

私は泣きながら笑っていた。作り笑顔ではなく、心から笑っていた。皮肉なことに、余命を意識してから、笑顔の母親になることができた。本当の母親になれたような気がした。

がんになったことは不幸だ。でも、がんになったことで、娘との日々が幸せで溢れていることに気付くことができた。娘の笑顔は一つ変わっていない。それなのに、今ではその愛くるしい笑顔を見るたび、愛しさがこみ上げてくる。「お母さんが笑顔のとき、いつも目が涙で潤んでいるな。」なんてこと、今四歳の娘は思わないだろう。でも、それが美希、あなたの母親の幸せに満ちた笑顔です。

「佳作」

愛顔の運動会

西田 金吾（大阪府）

運動会の最後の競技は駆けっこだった。足の速い子も遅い子も一生懸命走っている姿に観客席の誰もが温かい声援を送っていた。

いよいよ娘の出番が来た。「よいドン」の合図で一斉に駆け出して行った。あろうことか、その声援に取り残されたかのように、娘はスタートラインに突っ立っていた。何かあったのだろうか私には知る由もない。慌てて担任の先生が飛び出して、優しく諭してくださいましたが、娘はかたくなである。他の先生方も声をかけてくださったが、娘は益々意固地になって、立ち直るチャンスさえ失った。

そのうち、お友だちは全員ゴールインしてしまった。娘に温かい声援を送っていた観客もなすすべもないまま、空白の時間が流れた。私には耐え難い長い時間に思えてうろたえていた。

このまま、次の組と交代かと覚悟したその時、観客席から一人の男性がやおら上着を脱ぎ捨てて、娘のところへ駆け寄った。娘の大好きなスクールバスの運転手さんだった。彼に声をかけられて、あんなにかたくなだった娘が笑顔を見せた。彼は自分が行けば、娘は立ち直るだろうが、ここは自分の出番じゃないと、ずっとこらえておられたに違いない。

ない。

娘と運転手さん、ふたりだけのかげっこが始まった。再びみなさんの温かい目が二人に注がれた。彼は着かず離れずで、まるで二人が競い合っているかのように見えた。これも彼の温かい配慮であろう。割れんばかりの拍手の中、二人は揃ってテープを切った。娘はニコニコ顔だった。彼は照れ笑いしながら元の観覧席に戻っていかれた。

見事に娘の愛顔を引き出してくださいました。運動手さんと最後まで声援を送ってくださいましたみなさんの愛顔で、娘も私も一生忘れられない運動会になった。

娘は今、愛顔を育てる仕事をしている。育まれた愛顔はきつと次の愛顔を育むことだろう。愛顔の連鎖が続きますように。

「佳作」

心のリレー

吉原 詩織（愛媛県）

「人にしたことは必ず自分に返ってくる。」

これは祖母の口ぐせだった。そんな祖母が死んだ。突然の出来事で私は信じられなかった。つい一時間前まで一緒に話していたのに。祖母の笑顔を思い出すと、どこか自分の一部分が欠けてしまった気がした。

祖母が家から葬式場へ行く見送りには、近所の人や五十人ほどかけつけてくれた。ああ、祖母はこんなにも慕われていたのか、こんなにも涙を流してくれる人がいるのかと思うと涙が止まらなかった。

慌ただしく葬式が終わわり、帰宅すると、祖父宅はとても広く、寂しく感じた。一人になった祖父を心配し、毎日、近所の人が入れ替わりで訪ねて来てくれるようになった。余ったおかずや畑の野菜を持って。どうしてここまで。私は不思議に思い、祖父に尋ねた。祖父はくしゃつと泣き笑いの顔で言った。

「はあさんが近所の人にした親切が、わしらに返ってきたんだよ。」

と。それを聞き、分かるようで分からなかった祖母の口ぐせの意味がようやく分かった気がした。

祖母はいなくなってしまうた。でも、見えない形で私た

ちに大切なものを残してくれた。私にとっては真珠のネックレスより、何インチかのダイヤモンドの指輪より、それが一番の形見だった。祖母が亡くなり一年経つが、今でも近所の人や祖父宅を訪れてくれる。私も毎日祖父宅へ行き、来て下さった人にお茶を出し、世間話をする。私にできるのはこれくらいだ。私はもらった心を返せているだろうか。いつか祖母のように優しい人になれるだろうか。心のリレーをつなげたい。

「こんにちは。今日もありがとうございます。今年は暑いですね。」

今日も笑顔でお茶を出そう。

「佳作」

命と生きる

三好

舞（愛媛県）

校長先生が亡くなったのは、私が中学三年生の時の冬のことだった。

私が中学三年生になったばかりの頃、クラス替えの名簿を見て、とても仲がいいという友達がありませんでした。これからの一年が不安でたまらなかった。始業式が始まった、頭の中は不安でいっぱいだった。そんな時、校長先生が言った。

「置かれた場所で咲きなさい。」

この言葉は、私の不安を一瞬にして消し去るような、そんなパワーを持っていた。それから私は新しい環境でも自分らしくいようと決めた。私の心は軽くなった。不安でいっぱい私を救ってくれた校長先生に、感謝してもしきれない。

校長先生が病気だと知ったのは、それからもう少し後のことだった。以前までは体調が悪いだけだと思っていた。しかし、学校で見かけることが次第に少なくなっていく、たまに見かけると顔がむくんでいて、すぐに何か悪い病気なのではないかと思った。

校長先生が亡くなる少し前、全校生徒が体育館に集められ、校長先生の話を聞いた。内容は、「アンパンマン」と、「手

のひらを太陽に」という歌の歌詞についてだった。どちらについても共通することは、「生きる喜び」についてだった。「生きることは素晴らしいことだよ。だから命を大切に生きて、精一杯生きよう。」と、病気で弱々しくなった体で必死に話してくれた。

それから少し経ち、母の元に一通のメールが届いた。校長先生が亡くなったという内容だった。あの時の校長先生の話は、自分の命がもう長くないと悟って、生徒に命の大切さを伝えたのだろうか。校長先生は自らの命をもって、人間はいつか死ぬことや、命の大切さを教えてくれたように思う。最後まで生徒のことを考えてくれた校長先生を誇りに思う。

あの時の校長先生の話、私は一生忘れない。

「佳作」

母との約束

宮川

勉（大阪府）

私の家は貧しく、私が幼い頃から母は働いていた。母は毎日忙しく、私の卒園式の日も出席できなかった。私は、親と一緒に仲良く式に出席している友達が羨ましかった。その夜私は、次の卒業式こそ出席してほしいと涙ながらにお願いし、母も申し訳なさそうに小さく頷き、約束してくれた。

母は、子供達が大学を卒業するまで一生懸命働き続け、父と共に家計を支えてくれた。結局、小学校も中学校も高校の時も、母は私の卒業式に出席できなかった。私も、忙しい母の姿を見てみると、それ以上お願いする気にもなれず、いつしか約束の事も忘れてしまっていた。

それから月日が経ち、母が亡くなった。あまりに突然で、臨終の場に立ち会うことさえできなかった。悔しかった。せめて、今まで育ててくれた感謝の気持ちだけは、母が生きているうちにもっと伝えられたかった。

その一週間後、学生時代の頃の荷物の整理をしていた時のことだった。荷物の中から、まだ封が開けられていない母からの手紙を見つけた。封筒の中には便箋と一枚の写真が入っていた。それは、大学の卒業式に両親と三人で撮った記念写真だった。

写真の真ん中には、これから社会人になろうとする初々しい姿の私が写っていた。そして、私の右側には母が立っていた。

便箋には私への励ましのメッセージとともに、最後にこんな言葉が記されていた。

「お前の卒業式、最後に出席出来て本当によかったよ。約束を果たすの、遅くなってごめんよ。」

私は、幼い日に母と結んだあの約束の事を思い出した。母は、しっかりと覚えてくれていたのだ。

改めて写真の母を見た。何より家族の幸せが一番に思っていた母。その顔は本当に晴れやかで、優しさに満ち溢れた素晴らしい笑顔だった。思わず涙がこぼれた。

「写真部門」



全国に広がる600店舗

「Demand Chain Management」
= お客さま視点からの流通改革」
を起業精神とし、より良い商品・サービスをお客さまに提供してまいります。

DCM DAIKI 〒791-8517 松山市美沢 1-9-1
TEL(089) 925-1111 (代)
DCMダイキ株式会社 <http://www.daiki-grp.co.jp>

文芸社

本をつくらせて
本屋さんにならべましょう

まだ原稿になっていない
企画やアイデアでも
お気軽にご相談ください。

原稿募集

株式会社 文芸社
〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1
0120-03-1148

SerenDip明屋書店アエル店

明屋書店 HARUYA

松山市大街道2-5-12
アエル2F
TEL 089-941-4242
10:00-22:00 年中無休

マルトモ

コクと香りの
「マルトモ・厚削り箱入」

プレミアムな
枕崎産・直火焼枯節使用

厚さは、
直角削りの250ミクロン

お料理に合わせて、
煮出す時間を変えることで、
最適なコクのあるだしがとれます。

お野菜まぜ合わせ調味料 「お野菜まる。」

「お野菜まる」塩キャベツの素
「お野菜まる」たたききゅうりの素

北海道産昆布・
枕崎産かつお節使用

だしを効かせてやさしい塩味

だから、飽きがこなくて野菜が
沢山食べられます。

このつゆは、
鰹節屋でなければ作れない。

名店に負けないだしのは、蕎麦つゆ

飲み干したくなる濃厚だし、関西風
うどんつゆ

だしがらぶり、味まろやか。素麺つゆ

鰹節にこだわり続けてきたヤマキが、
細くするためにブレンドしただしを賞状に使用
これまでにないだしのは濃さとうま味を極めました。

「隠しきれない愛顔」

村上 錠 (愛媛県)

驚かそうと草陰より登場、何歳までこんな遊びをしてくれるのか！今のこの時期の瞬間を残したい。



優秀賞

「あそぼうよ！」

佐藤 真弓 (北海道)

楽しい気持ち・もっと遊びたい気持ち、言葉はなくても笑顔で通じる。うれしくなる♪



「進撃の野菜」

鈴木 緑 (埼玉県)

実家の畑は子供達用に大きな野菜を残してあるので「お爺ちゃんの畑すごい」「巨人の野菜だ！」と大喜びです。



知事賞

「がんばったね！
～わたしがママよ～」

松元 澄夫 (奈良県)

今年の2月に二人目を出産した時の一枚です。



白川義員特別賞

「夏を満喫♪」

波木井勇次 (静岡県)

梅雨の合間の夏日に庭で水遊び♪大喜びする息子がかわいすぎる～！！



河原学園賞

「じいじって
面白いね！」

中村 天津 (京都府)

孫の笑顔が見たくて、脇でじいじが奮闘中。汗だくで体を張ったじいじのパフォーマンスにみんな大爆笑。



「一般の部」

知事賞



「麦藁笑顔」

出崎 理子 (和歌山県)
田植えをしていたおじさまで
す。

「高校生の部」

白川義員特別賞



「愛顔で一等賞」

越智 健斗 (愛媛県)
校長先生はいつも私たちを愛
顔で見守ってくれています。
運動会では生徒と共に一等
賞。校長先生は今日も愛顔で
す！

河原学園賞



「歓喜の笑顔」

是澤 亮太 (愛媛県)
負けたら終わりの高校野球。
彼女のチームが逆転した時の
心からの笑顔を画面いっぱい
にとらえました。



「青空と笑顔」

藤山 香絵 (大阪府)
初夏の青空と、元気いっぱい太陽みたいな笑顔。



「まんめん」

谷口 政彦 (京都府)
カメラで顔を隠し「いないいないバア〜」と顔を出
した瞬間の笑顔。この純粹無垢な笑顔は私の元気の
源です。



「お嫁さんとケンカ後」

岡本 吉晋 (愛媛県)
お嫁さんと些細な事で喧嘩し、子供と逃走。子供の
笑顔に癒され反省する友達を撮影しました。



「ずっとずっと友達」

大野 久子 (神奈川県)
娘が幼稚園の頃の仲良しのお友達との写真です。ずっ
とずっと友達でいてほしいです。



「ジャンプ」

石田めぐみ (北海道)
妹の要望に応える姉と兄。歳の差はあるけれど、こ
れからもずっと仲良く遊んでほしいと思っています。

知事賞



「勝ってうれしい
はないちもんめ」

丸山 真司 (愛媛県)

昼休みのはないちもんめ。このままずっと遊んでいたいなあ。ともだち大好き。

「小学生の部」

白川義員特別賞



「ママといっしょに」

橋本さゆき (兵庫県)

わたしの妹は1歳。手を支えると歩くまねをします。ママとにこにこ楽しそうで、わたしもうれしかったです。

河原学園賞



「さあ！やるよ！
最高の演奏を！」

田頭まなみ (愛媛県)

ジュニアバンドフェスティバル本番前、やる気満々の笑顔を見せてくれた仲間。緊張がほぐれました。

知事賞



「まだ夢の中。」

井上 颯人 (愛媛県)

昨日の楽しい思い出を再現中です。

「中学生の部」

白川義員特別賞



「みんなで
ラッコの気分」

濱上 夕夏 (愛媛県)

ぶかぶか浮いて気持ちいいよ！！

河原学園賞



「おいしそう」

山本 有紗 (愛媛県)

石が美味しそうな感じ。

審査員紹介



神野 紗希
(審査委員)

1983年愛媛県松山市生まれ。
2001年、松山東高等学校時代に第四回俳句甲子園にて団体優勝、「カンバスの余白八月十五日」が最優秀句に選ばれる。
2004年、第一回芝不器男俳句新人賞坪内稔典奨励賞を受賞。
2006年から、6年間、NHK『俳句王国』司会を担当。
現在、明治大学兼任講師。



新井 満
(審査委員長)

1946年新潟県生まれ。作家、作詞作曲家、写真家など多方面で活躍。1988年、『尋ね人の時間』で第99回芥川賞受賞。
2005年、『この街で』（作詞：新井満、作曲：新井満、三宮麻由子）を制作。
2007年、『千の風になって』で第49回日本レコード大賞作曲賞を受賞。
2014年、正岡子規の俳句にメロディをつけ、松山市民の愛唱歌「春や昔」を制作。子どもから大人まで松山市民に愛される曲となる。



白川 義員
(特別審査員)

1935年愛媛県四国中央市生まれ。ニッポン放送、フジテレビを経て、1962年フリー写真家。1993年に南極大陸一周に成功(史上初)。1996年から「世界百名山」撮影プロジェクトを開始、作品集「世界百名山」を出版。
2002年、国連が「国際山岳年」を記念して、作品集「世界百名山」の中から12作品を選んだ記念切手を発行。記念切手12種類全点を1作家で制作したのはフェルメール、ダリ、ピカソなどに続いて世界で11人目、写真では初。
2012年11月、作品集「永遠の日本」発表。
1972年、第13回毎日芸術賞
1972年、芸術選奨文部大臣賞
1988年、第36回菊池寛賞
1995年、第27回日本芸術大賞
※上記芸術4賞総てを受賞したのは、白川義員ただ一人。
このほかにも、1981年、全米写真家協会最高写真家賞(史上10人目)を受賞するなど世界を代表する写真家。

中村時広(審査委員)

1960年愛媛県松山市生まれ。
1982年三菱商事株式会社入社。
1987年愛媛県議会議員。1993年衆議院議員。
1999年愛媛県松山市長。連続3期当選。
2010年愛媛県知事。2014再選、現在2期目。

愛媛県獣医師会賞



「理沙ちゃん笑顔がすてき。おいしい給食」

和泉 茉桜(愛媛県)

私と大の仲良しの理沙さん。給食のおいしさが伝わる笑顔です。

愛媛県歯科医師会賞



「新谷じいちゃんばあちゃん」

丹下 真央(愛媛県)

祖父は、小さな畑でお野菜を作っています。形は色々ですが、できたお野菜はいつもとてもおいしいです。

愛媛県旅行業協会賞



「しあわせ！」

遠峰 綾華(茨城県)

タイトルには、夏の暑さの中飲むラムネの冷たさから眉間に寄ったシワと幸せそうな笑顔の二つをかけました。

愛媛県商工会議所連合会賞



「最高の笑顔」

高橋 一吉(兵庫県)

入園日の孫、最高の笑顔です。

愛媛県情報サービス産業協議会賞



「未来への希望」

政岡 宙(愛媛県)

兄が初めて育てた朝顔、たくさんの種が笑顔で収穫できました。来年もきれいな花を咲かせてくれるといいな。

愛媛県理容業生活衛生同業組合賞



「笑顔の叫び」

川本 雅士(愛媛県)

みんなで楽しく遊んでいる時、みんなが笑顔になったので撮りました。

愛媛県経済同友会賞



「元気なお婆ちゃん」

坂本 静華(愛媛県)

農作業に出かける時の写真です。笑顔から元気をもらう1枚の写真です。

愛媛県広告協会賞



「愛姫の笑顔でお国自慢」

吉田 珠里(愛媛県)

ホテルのレセプションでお客様に最高の笑顔で「おもてなし」をした後の満足感あふれるみんなの笑顔です。

子どもたちの未来のために、 伝えたい想いがあります。

JAバンクえひめでは、食と農業に対する学習や農業体験などを
はじめとした様々なCSR活動を通じて、
自然と調和・共生できる循環型社会の実現をめざし、
地域の皆様の豊かな未来の実現に取り組んでいます。

JAバンクえひめキャラクター
ぱんじゃくん



JAバンクえひめ

JA うま	JA 新居浜市	JA 西条
JA 周桑	JA おちいまばり	JA 今治立花
JA 松山市	JA えひめ中央	JA 愛媛たいき
JA にしうわ	JA ひがしうわ	JA えひめ南
		JA 愛媛県信連

 **JAバンクえひめ**
(愛媛県下JA / 県信連)

「JAバンクえひめ」は、愛媛県下12JAと県信連の総称です。

JAバンクえひめ

検索